

二〇二六年度

## 第二回入学試験問題

【国語】 時間 45分

【校長からのメッセージ】  
おはようございます。

あなたの新しい一歩となる朝です。

深呼吸をして、ゆっくりと気持ちを整えましょう。

左の【注意】をよく読んでから始めてください。

これまでふれてきた言葉や思いが、きつとあなたの味方になります。

自分を信じて、一問一問をていねいに読みましょう。

大丈夫。あなたの中には、たくさん言葉の力があります。

【注意】 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。

2 問題用紙は、全部で18ページあります。試験中によごれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。

3 解答用紙は問題用紙にはさまれています。

4 問いに字数指定がある場合には、最初のマス目から書き始めてください。なお、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ドーン、ドーン、ドーンと、3回、太鼓を叩く音がした。

その音が響く中、俺たちは園内のイベントステージ会場に来ていた。

ヒーローショーを見たいというのは、息子の大吾のリクエストだった。

それで家族4人でここに足を運んでみたのだが、客席はびっくりするほどまばらでほとんど人がいない。

派手なシマシマ紅白のエプロンをつけたピエロが、客席周りを闊歩している。

さっきの太鼓はこのピエロが叩いたのだ。

調理器具を下げたカートに、時計の針がついた大きな丸い太鼓が載っている。

時刻を見るに、3時の時報だったらしい。

ヒーローショーが始まるのは15時15分とパンフレットに書いてあった。

そのうち客が集まってくるだろうと思いつながら、俺たちは客席に向かっていく。

うちの家族構成は、俺と、妻の芳子、11歳の理穂、5歳の大吾だ。

遊園地に来て、家族4人が2人ずつに分かれて行動するにはちょうどいい。

さつきも、俺と大吾がフードコートでのんびりしている間、理穂は芳子と一緒にジェットコースターに乗っていた。

「ヒーローショーって、何やるんだろ」

イベントステージ会場で合流した理穂は、興味なさそうにつぶやいた。

小学5年生のお年頃は、もう、こんなものはガキっぽく感じるのかもしれない。仕方なくつきあってやるといふ様子がありありだった。

「一番前の席がいいなあ！」

大吾がはしゃいで大声を出した。

自由席なのでどこでもいいようだ。

大吾はステージ前の席をめがけ、一目散に走っていく。

そんな大吾を追いかけようとして俺がピエロの前を通り過ぎると、すれ違いざまにはちりと目が合った。するとピエロは、両腕を上げながら言った。

「ワラッテ！」

はあ。

笑って？

「あははははは！」

俺はピエロに笑って見せる。

ピエロも大きなおなかをゆすって笑った。

外国人であろう彼は、今朝、回転マシンの前でポップコーンを作って配っていたピエロだ。

大吾もポップコーンをもらって、おいしいおいしいと言って夢中で食べていた。

ふと大吾がピエロのほうに顔を向けた。

「ピエロさーん、さっきはありがとう！」

大吾が、ピエロに手を振る。

ピエロはにいと、べったり赤くペイントされた口角を上げ、カートにつけられていた赤い風船をひとつ、大吾に渡した。大吾は歓声を上げてそれを受け取った。

糸がつけられた風船はふわりと浮かんでいる。

大吾は手に持ちたがったが、こんな小さい子どもでは、うっかりすぐに放してしまうだろう。風船が飛んでいかないように、俺は大吾の腕に風船の紐を一周させて結わえた。

大吾はそれがすぐ気に入ったようで、腕を上下させながら、揺れる風船を眺めていた。ステージはまだ始まらない。大吾は足をぶらぶらさせながら言った。

「ねえ、おやつ食べたい。3時だよ」

俺はちよつとあきれて笑った。

「本当に食いしんぼうなヤツだな。ポップコーン食べて、ソフトクリーム食べて、姉ちゃんのマネしてホットドッグ食べたじゃないか」

大吾は聞く耳を持たず、芳子のほうに身を乗り出す。

「お母さん、さつきドーナツ買ったでしょ。あれ食べたい」

芳子が苦笑しながら、トートバッグの中から紙袋を取り出した。

フードコートでテイクアウトしていたのを、大吾はしっかり見ていたのだ。

芳子はペーパーナプキンにドーナツを挟み、大吾に渡す。

苺のチョコレートがかかったドーナツにかぶりついたあと、大吾は片目をつぶって穴をのぞいた。

「どうしてドーナツには穴があいてるの？」

芳子は迷うことなく答える。

「説はいろいろあるけど、揚げやすいからってというのが一番でしょうね。それから、わかか形、楽しいでしょ。それも大事なことよ」

そこで彼女は、ふふふと笑い、こう続けた。

「でも、穴のあいていないドーナツもあるでしょう。ねじってるのとか、ボールとか。ドーナツは穴があいているものって、決

めなくてもいいのよ」

さすが教師だ。

芳子は本当に、なんでもすらすら答えられるんだな。すごいな。

彼女に質問すれば必ず答えが返ってくる。しかも補足説明つきで。

賢くユーマアがあつて、しっかり者で。

まったく俺には太刀打ちできない。

芳子みたいな母親がいる子どもたちにとって、俺は父親としてへなへなで頼りない男なんだろうな。

たとえば、大吾のしめった手ににぎりしめられているペーパーナプキン程度の。

ドーナツの甘い匂いを嗅いでいたら、遠い昔のことを思い出した。

新婚旅行で芳子とアメリカに行ったときのことだ。

中古レコード屋で見つけたシングル・レコード。

「ドーナツ盤」ともいうんだよなって話しながら、あれこれ手にして楽しんだ。

俺はそのとき、一枚のドーナツ盤を芳子にプレゼントしたんだ。

ハネムーンの思い出になって、俺が選んだのはエルビス・プレスリーの「ラブ・ミー・テンダー」だった。

家にはレコードプレイヤーなんか無いのに、つくづくばかな話だ。

だけど芳子は「いいの、私にはちゃんと聴こえるわ」なんて、まあ、新婚さんの甘い会話ってことで、俺の中ではスイートな記憶になっている。

ラブ・ミー・テンダー。

愛する人への想いを伝える曲だということだけは理解していたからセレクトしたわけだが、俺には歌詞どころか「テンダー」の意味さえもうろ覚えだった。

それで、そのとき芳子に訊ねたのだ。

「テンダーって、なんだっけ？」と。

自分でそう言ったそばから、とたんに情けなくなった。

芳子が英語教師をしているのをいいことに、旅行の間ずっと、俺は何をするにも芳子に訊いてばかりいた。食べ物を選ぶときも、電車に乗るときも、看板に書いてある文字も。

あげくの果てに、プレゼントしたレコードのタイトルさえ質問している。

しかし芳子は決して俺をばかにしたりせず、穏やかに答えてくれた。

「優しい、ってことよ」

そのほほえみを見ながら、俺はなんて返事すればいいのかわからなかった。

芳子の友人や親戚と初めて会うとき、俺は「優しいような人ね」と言われることがあった。とりたてて特徴もなく、他に言いようがないのだろう。

「優しいそう」はつまり、「気弱そう」ということなのかもしれない。そんなふうに思ってしまう卑屈さも含めて。

芳子は俺のことを誰かから「優しいそう」と言われるたび、にっこりと笑ってこう答えるのだ。

「本当に優しいのよ」

のろけるでもなく、説明書を読み上げるくらいのフラットさで。

そしてそれ以上のことはコメントせず、相手にも深追いさせない。そんなさりとした自然なふるまいは、いつも俺を感服させる。

結局、俺はあのレコードを聴いたことはない。たぶん芳子も。

ほどなくして、明るい音楽が聴こえてきた。

ステージの上に着ぐるみのキャラクターが2人、登場する。

この遊園地のオリジナルキャラだ。茶色の犬とピンクのウサギ……であろう。たぶん。おそろしくダサイ。

「みなさん、こんにちわ！」

ふたりは客席に両手をびろびろと振り、声を揃えた。

「山中青田遊園地へようこそ！」

彼らの胸元には、カタカナで名前らしきものがフェルト地で貼られていた。

半ズボン穿いた犬が「ヤー」、耳にリボンをつけたウサギが「アー」だ。

山中のヤー、青田のアー。ネーミングもはなはだ芸がない。

いい天気だねとか、遊園地は楽しいねとか雑談をしながら、ヤーが言った。

「最近、僕たちのことをおどかしたり、いたずらばっかしてくるキーキー族っていう集団がいるんだ」

「こわいわねえ」

アーも身震いしている。

そこに、合図のように「ババーン！」という効果音が鳴り、ステージの端から今度は猫の着ぐるみが登場した。

青いボディースーツと赤いブーツ。あきらかに、正義のヒーローだった。

胸には大きく「G」というロゴが描かれている。

「困っている人の力になりたい、ぐるにゃん戦士だよ！」

山中青田遊園地が正式名称のこの遊園地は、地元民のみんなに「ぐるぐるめ」と呼ばれている。

その理由がいまいちわからなかったのだが、そうか、「ぐるにゃん戦士」から来てるのか。

……いや、待てよ。このヒーローっていつからいるんだ？ まだ新しいよな。

ひよっとして、みんなが「ぐるぐるめ」って呼び出したから、後付けでこのキャラが生まれたのか。

だとしたらすごい話だな。大衆の声がヒーローを生むなんて。

しかしそのあとのステージは、なんとも退屈な展開だった。

時間調整なのだろうか。アーは朝起きるのがつらいとか、ヤーが走るのが遅いとか、困っていることを打ち明け始める。

しかしそれがなんなんだという感じだし、本題の「キーキー族」のことなどこつちも忘れてしまいそうだった。たまにぐるにゃん戦士がギャグを言うのだが、それがまた、かわいそうになるくらいウケない。正義のヒーローはそんなことをしなくたっていいのに。

3人がぐだぐだとゆるい話をしているうち、最初はぼつぼつといった客が、ひとり、ふたりと席を離れて行く。

「私、もうプール行きたい」

理穂がごねだした。

もともと、このイベントステージが終わったら園内のプールに行こうと話していたのだ。

トートバッグに入っている、新しい水着を早く着たいらしい。

ちらっと、芳子が俺を見た。

俺はその目に合図を読んだ。

彼女たちだけ先に行くという提案なのだろう。

あたりを見回すと、客席にはもう、ごく少数しかいなかった。

最後列でイチャイチャしてるカップル、端っこで座ったまま、ぐっすり眠りこけているおっさん。

あとは、最前列の俺たち4人のみ。

こうなるともはや、このステージは俺たち家族のために上演されているといっても過言ではない。

なのに、もしこんな目の前でまたふたり離脱していったら、ステージにいる彼らはどれだけ心が折れるだろう……。きつとがんばって練習してきただろうに。

「……ちよつと、待ってな。もう少し見てからにしろ」

俺が小声で阻止すると、理穂は唇を失らせながらもステージに顔を向けた。

舞台の上では、猫とウサギと犬がわちゃわちゃと話し続けている。

「ぐるにゃんは戦士なの？」

「そうだよ！」

「あのね、僕たちのことをおどかしたり、いたずらばかりしてくるキーキー族っていうやつらがいて、困ってるんだ」

俺は、ほっと息をついた。

よかった、いよいよヒーローショーが始まる。

ぐるにゃん戦士が、自分の胸をドンとたたく。

「ようし、まかせろ！」

そこに突然、「キー！」という雄たけびが聴こえた。

ステージの両脇から、揃いの黒マスクと全身黒タイツの奴らがふたりずつ現れ、ぐるにゃん戦士たちを威嚇する。

弱そうだが気味悪くはある。

なかなかのインパクトだった。

「出たな！ キーキー族のキーキーマンたちめ！ 僕が許さないぞ！」

ぐるにゃん戦士は勇ましく戦いのポーズを取る。

するとキーキー族は二手に分かれ、客席に降りてきた。

右側と左側で、本来ならいると想定された客に向かってキーキー驚かせるつもりだったのだろう。

しかしステージ付近の客は俺たち家族4人しかいない。

最後列のカップルのところまで行ってわざわざ邪魔するもの、寝ているおっさんを起こすのも得策でないと踏んだようで、遠くまでいかず近くで騒いでいる。

「キー！」

ひとりのキーキーマンが、両手を大吾の方に広げた。  
その瞬間、大吾が「あっ」と叫んだ。

腕に結わえてあった風船の紐が、するりと外れてしまったのだ。

大吾がびっくりしている間に、空に上がっていく風船。

とっさに、キーキーマンは軽くジャンプし、風船をキャッチした。  
お見事だった。

思わず家族4人、おおー！と歓声を上げてしまったくらいだ。

風船の紐を、腰をかがめながら大吾に渡すキーキーマン。

大吾は「うわあ、ありがとう」と風船を受け取る。

① 俺はなんだかほほえましい気持ちになった。

キーキーマンの「中の人」の素が、思わず出ちやっただんな。  
見えないけどわかる。

あの黒マスクの下は、きっと笑顔だっただろう。

しかし彼は今、キーキーマンである。

ステージに戻ると、ぐるにゃん戦士に向かって「キー！」と怪しい動きを見せながら近寄っていった。

「とおーっ！」

ぐるにゃん戦士が彼に向かって飛び蹴りをしかけた、そのとき。

「やめて！ けらないで！」

大吾が大声で叫んだ。

思わず、俺たち家族も、

ぐるにゃん戦士も、キーキーマンも、ヤーもアーも、

びたっとフリーズした。

世界が止まった。

物語が止まった。

理穂があわてて大吾をたしなめる。

「やだ、ちょっと大吾。あれは悪いヤツだからやっつけないと……」

大吾は涙ながらに訴えた。

「悪くないよ。あのキーキーマンは、ぼくの風船を取ってくれたよ、いい人だよ！」

それはそうだけど、と理穂は口ごもる。

ぐるにゃん戦士たちはシンとして動かなくなってしまった。

「ぐるにゃん戦士はどうしてあの人をけつてもいいの？ それは悪いことじゃないの？」

泣きながら問いかけてくる大吾の声。

俺はハツとして、息をのんだ。

芳子も黙って、真剣な表情で大吾を見ている。

理穂が真っ赤な顔をして言った。

「……やだ、もう」

② そして少しうつむいたあと、バッグを手に持ち、立ち上がるうとした。

「私、やっぱりもうプール行ってるね。恥はずかしい」

恥はずかしい……？

③ 俺はほとんど無意識に、ぼそりと低い声でつぶやいていた。

「恥はずかしくないぞ」

理穂がこちらを見る。

俺はもう一度、今度はしっかりと理穂に向かって言った。

「恥はずかしくなんか、ない」

すると理穂は何か突つかれたように真顔になり、浮うかしかけていた腰をすつと椅子いすに降くだりした。尖とらせていた唇は、今、一文字に結むすばれている。

少しだけ間まが流ながれた。

ほどなくして、棒立ちになっていたぐるにゃん戦士が、突然バツと両腕を顔の前でバツテンにする。

「よーしっ、ここからは、ぐるぐるで勝負だ！」

ぐるにゃん戦士は、ぐるっと一回、バク転した。

「すごい！」

大吾が目を丸くしている。

ぐるにゃん戦士は得意気に笑った。

「僕は猫だから、お手の物さ！」

なるほど、たしかに。

初めからそういう台本だったのか、この不測の事態にぐるにゃん戦士がアドリブを利かせたのか、そこからの「戦い」は互いのパフォーマンスの披露会だった。

ぐるにゃん戦士がバク転し、キーキー族が側転し、ステージはぐるぐるとアクターたちが回り続ける目を見張るような楽しいショーになっていた。

どちらもすごい。俺は大きく大きく拍手した。

いいぞ、ぐるぐるめ!!

素晴らしいステージだ。

それぞれの技を競い合う、こんな切磋琢磨の「戦い」を見せてくれるなんて。

アップテンポな音楽に合わせてヤーとアーが踊り出し、いつのまにか、観客が増え始めていた。ガラガラだった席に人が集まり、ステージと一体化するのを感じる。

おっさんは目を覚ましてステージを観ているし、カップルも手を叩いている。

気がつけば、ステージのすぐ下でピエロもくるくると腕を回していた。

笑って。笑って。笑って。

音楽がだんだんスローになり、キーキーマンたちは疲れた仕草でへなへなと座り込んでいった。ぐるにゃん戦士がひときわ大きなバク転をびたりと決め、ジャン！と大きな効果音が響く。

ヤーが嬉しそうに叫んだ。

「勝負あり！ キーキー族はもう、いたずらはしないって言ってるね！」

ぐるにゃん戦士は、ステージと会場の両方に向かって明るく言った。

「でも、キーキー族のぐるぐるもすごかったよ。そのパワーを、みんなで楽しいことに使えたらいいね！」  
キーキー族たちはみな、大きくうなずく。

近くの仲間と肩を組んだり、腕を空へと掲げたりしながら、大きな拍手の中で、ステージは幕を閉じた。  
俺たちを楽しませてくれた面々は舞台袖へと退場していく。

風船を取ってくれたキーキーマンが、去り際に、大吾に向かってことさら大きく手を振っていた。

家族四人で拍手をしたまま、俺たちはなんだかぼうつとしていた。

理穂がぼつんとつぶやく。

「……正義のヒーローは悪者に暴力をふるってもいいのか……。どうなんだろう？」

それを聞いて、芳子が穏やかに言った。

「それはまず、正義とは何かというところから考えなくちゃいけないわ。理穂は、どう思ったの？」  
「私は、よくわからない。だって、今までそういうもんだと思ってたし」

うつむきがちにそこまで言って、理穂はぼつと顔を上げた。  
「でも、ちゃんと考えてみたいなって……思った」

④ それを聞いた芳子は、嬉しそうに片腕で理穂をぎゅつと抱き寄せる。

「それが今の理穂にとって、一番素晴らしい『答え』よ」

客席を立ち、大吾は風船を揺らしながら小走りに会場を出る。

理穂もプールに行きたくて少し早足だ。

子どもたちふたりの背中を見ながら、俺は芳子に言った。

「ああいう答え方もあるんだな……」

「え？」

「芳子は誰に何を訊かれても、ぱっと正解を出すんだと思ってたよ」  
軽く首を振り、芳子は笑った。

「何言ってるの。この世の大半は、正解のない問いばかりよ」  
そして満足そうに、愛おしそうに子どもたちを見た。

正解のない問いばかりの中で、もがいているのは子どもも大人も同じだ。  
答えを探しながら、誰かに教えられながら、自分を伝えながら、  
できることならば笑って。笑って、笑って。

肩を並べて歩いていると、不意に芳子が言った。

「ねえ、大吾って、あなたに似てるわよね」

「え、そうかな」

イヤかな、俺に似たら。

内心そう思っていると、芳子は俺を見上げてほほえむ。

「うん、似てる」

「どんなところが？」

「だって、持ってるじゃない。レコードみたいに中心の軸じくがブレない、優やさしさいっぱい愛あい」

そう言っつて芳子は、子どもたちを追うようにして俺の前を歩いていく。

風に乗ってふわり、ふわりと、芳子から「ラブ・ミー・テンダー」の鼻歌が聴こえてきた。

(青山美智子・田中達也『遊園地ぐるぐるめ』)

問一 — 線部① 「キーキーマンの『中の人』の素が、思わず出ちやった」とありますが、これはどのようなことですか、説明しなさい。

問二 — 線部② 「私、やっぱりもうプール行ってるね。恥ずかしい」・ — 線部③ 「恥ずかしくないぞ」とありますが、大吾の発言を受けて、なぜ「恥ずかしい」「恥ずかしくない」と言ったのですか。主語を明らかにしてそれぞれ説明しなさい。

問三 — 線部④ 「それが今の理穂にとって、一番素晴らしい『答え』よ」とありますが、芳子は理穂にどのようなことを伝えようとしていますか。「それ」の内容を明らかにして説明しなさい。

問四 — 線部⑤ 『ラブ・ミー・テンダー』の鼻歌」から、芳子は「俺」をどのように思っているとわかりますか。「俺」自身の自己評価と比べながら説明しなさい。

## 二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本介助犬協会では、補助犬には向かないと判断された犬たちの個性を見極め、その犬がもつとも活躍できそうな場にキャリアアチェンジさせます。その一つが、障害のある人や子どもがいる家庭にキャリアアチェンジ犬を譲渡する「With Youプロジェクト」です。受け取り手となる人と犬の個性を慎重にマッチングした結果、これまでに二八頭がさまざまな家庭に譲渡されています。

知的障害を伴う自閉症の若者がいる家庭の。ペットになったゴールデン・レトリバーのユーティ(二歳)も、その一頭です。田口星太さんは聴覚過敏があり、犬の吠え声に驚いてしまいます。大好きな両親は、星太さんに生き物と暮らす経験をしてほしかったのですが、犬は吠えるから飼うのは無理だろうと思っていました。それが、あるとき星太さんの同級生の家に譲渡された日本介助犬協会のキャリアアチェンジ犬と出会い、「吠えない犬もいる」ことを知ったのです。

そこで、協会に相談し、待つこと約六年。二〇二一年の秋、ついにユーティが家にやってきました。動物は嫌いではないものの、さわるのは苦手という星太さんに、両親は「うちに遊びに来てお泊まりする犬だからね」と紹介し、徐々に慣らしていきましました。

最初は「えー、今日も泊まるの?」といていた星太さんでしたが、三か月ほど経ったある日、近所の理髪店の人に「協会に返すの?」と聞かれたときは、「ユーティはもう返しません。いっしょに家で暮らすんです」ときっぱり答えました。そばで聞いていたお父さんはしみじみ嬉しく思ったと言います。

「星太は変化が苦手で、自分のルーティーンにこだわる。そこに新しく加わった犬という存在を、家族として受け入れることができた。少し成長したのかな、と」

日中は福祉作業所に通っている星太さんが夕方帰宅すると、ユーティはお気に入りタオルをくわえて出迎えます。星太さんはそれを受け取って投げ、ユーティが見事キャッチすると、頭を撫でてあげる。以前は「大丈夫だから、さわってみて」と促さなければならなかったのが、自分からユーティを撫でられるようになりました。

また、ドアを閉めるときは、「ユーティ、どいてー。危ないよー」と、ユーティがドアに挟まれないよう注意するようになり

ました。そんなことはいままでなかった、とお父さんは話します。

「これまでは自分が周りから気をつかわれるほうだったのが、気づかう相手ができる。守らなきゃいけないものができた。妹みたいなものなのかもしれませんね」

ユーティのほうも、新たな一面を見せるようになりました。訓練士の山口歩さんによると、「ユーティは自分の興味を優先する子」で、人の歩調に合わせるのが苦手だったそうですが、星太さんと歩くときだけは彼かれに合わせて歩くので、とても散歩がしやすいといえます。

「こんなふうになるとは、訓練中は予想していませんでした。ユーティには障害のある人を気づかう資質があるようです」

※

星太さんのケアを長年家族の中心で担になってきたお母さんは、以前は公園で犬と散歩している人たちを見て、「いいなあ、いか私わたしもこんなふうにできたらなあ」と思っていたそうです。そんなお母さんにとつて、ユーティが家に来たことは「これまでがらんばってきたご褒美ほうび」。コロナ禍かで暗いニュースばかりがあふれていた日々でも、ユーティが話し相手になってくれました。

また、もともと仲のいい家族だったのが、ユーティが来てからはさらに会話が增え、星太さんと双子ふたごで大学院生のお兄さんもユーティの散歩に加わったりと、家族のつながりが深まりました。

さらにユーティを連れて散歩していると、これまで面識のなかった人たちからつきつきと声をかけられ、地域に知り合いがたくさんできたことも大きな収穫しゅくかくでした。

田口さん一家は星太さんの障害を隠かくすのではなく、地域の人々に理解し、受け入れてもらいたいと願っています。星太さんがユーティといっしょに歩くことで、「ユーティんちの兄ちゃん」として知られ、見守る人の目が増えれば、星太さんの安全にもつながるだろうと期待しています。星太さんは、出会う人ごとに「うちのユーティです。よろしく」と紹介するようですが、じつはユーティのほうも「うちの星太さんです。よろしく」と思っているかもしれません。

直接障害のある人の介助はしなくても、ユーティは地域の人々とのつながりを深め、障害のある人が社会に出ていく助けになっています。「ユーティ」という名前は子犬時代のユーティを預かり育てたパピーファミリーがつけたもので、「ユーティリテイ」(「効用」「役に立つもの」という意味)という英語から来ています。さまざまな人の役に立つようにとの願いを込こめてつけたの

だそうです、まさにその名のおりの活躍ぶりです。

(大塚敦子『動物がくれる力 教育、福祉、そして人生』)

### 問一

——線部「日本介助犬協会では、補助犬には向かないと判断された犬たちの個性を見極め、その犬がもつとも活躍できそうな場にキャリアチェンジさせます」とありますが、ユーティを補助犬ではなく星太さんの家に来るように「キャリアチェンジさせ」たのはなぜですか、説明しなさい。

### 問二

ユーティは星太さんにとって、どのような役割を果たしていますか。※以降の文章を読んで百字以内で説明しなさい。

### 三

各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 旅行に向けて、メンミツな計画を立てる。
- (2) あの二人はよく似たカツコウをしている。
- (3) 先生の説明を、サイダイもらさずノートに書きとめた。
- (4) 困っている友だちにカセイする。
- (5) 賞をもらって、兄はキシヨクマンメンであった。

